あさ 8

2015

黒　斑　山

須賀忠男

呼称　くろふやま
標高　2,404 m

夏山やばかていねいに赤い花　小林　一茶
夏山を統べて槍ケ岳真青なり　水原秋桜子
素描は黒夏山の紺眼前に　高島　茂
夏山や陽に染めかへる面白さ　芝宮須磨子
ぐいぐいと画布をはみ出す夏の山　竹内　弘子
味噌汁の香にほつとする夏の山　森　理和

あとがき

八　月

梅　雨

佐藤喜孝
東京

死後のあり便器に春のわすれ水

驛をでてみな家路なり春燈

旅人のやうに醒めたる春の雪

春の雪校歌にありし山と川

けふもまた別れて出會ふ梅雨の妻

壇蜜と会ふも合はぬも男梅雨

夏葱のへし折られたる前籠に

もうすぐ赤とんぼが飛ぶ季節になる。赤とんぼといへば父がよく口にしてゐたことを思ひ出す。子供のころ育った秋田の大館で見た赤とんぼのことである。その赤とんぼは胴体は勿論羽まで真っ赤であったさうだ。勿論私も見たことはない。図鑑でも見かけない。沖縄の方にタイリクショウジョウトンボとふ羽の筋が赤い蜻蛉がゐるらしいが、温暖化ではない明治時代に秋田まで飛んでは来ないだらう。又筋は赤いが他は透明なので父が見た蜻蛉とは違ふやうだ。老年になってもそのことを話してゐたので特別印象深かったのだと思ふ。もう一つ父のお気に入りの花に翁草がある。雑誌のカラー写真を見つけ切抜いて自ら額装にしおトイレに飾ってゐた。これも父の父に連れられて鉱山へ行ったときに見たさうだ。この花も私は見損ってゐる。翁草の方は無理をすれば見られさうだが、トンボの方はどこかで見かけたやうな記憶がうっすらとあるのだがきっと錯覚だ。これは親子二代幻で終りさうだ。

らっきょ漬

定梶じょう
石川

することのなく日が暮れて連翹花
大いなる潮干にがうな困惑し
浜豌豆花の戦ぎの夜に入るも
袋掛遠きサイレン正午なり
赤ばかりあぢさゐが咲きつかれたる
豆電球の下にありても枇杷匂ふ
らっきょ漬ける夢みて寝覚さびしめり

三陸海岸

須賀敏子
埼玉

再建の駅舎三陸鉄道（さんてつ）薫る風
山崩し続くダンプや雲の峰
くっきりと津波到達茂る草
駅ごとに御当地ラムネ並んでる
熊注意小さな鈴を持つガイド
雨戸まだ開かぬままや桐の花
米粒のやうな南天花開く

「忘れる」の語は文語では、「忘れず・忘れて・忘るる時」と活用した。下二段活用。

忘れたるころ流灯の一つ来る
森田　峠

そして万葉集の頃には下二段と共に「忘らず・忘りて・忘る時」と四段に遣われたらしい。あるいは平安時代でも「忘らる」という連語に四段活用が残っていて、百人一首に

忘らるる身をば思はず誓ひてし
人の命の惜しくもあるかな

は平安期の歌だ。二段に活用するなら「忘れらるる」であろう。学校では二段活用の語としてしか教えないだろうが、現代でも四段に遣った句はある。

冬の日の光らざるもの忘らるる
油布五線

元日や忘られてゐし白兎
飯田龍太

六月一日～二日、新韓線とバスを使って、三陸海岸へのツアーに参加した。岩手県へは百名山の山行で何度か行っているが、三陸地方は初めてである。盛岡より岩泉龍泉洞を見学。島越より田老まで三陸鉄道北リアス線に乗った。田老では防災ガイドの案内で防潮堤にのぼり、津波被害の説明を聞いた。四年目にしてやっと被災地に来ることが出来た。

復旧も復興もまだまだである。津波で流された跡には夏草が茂っていた。

奇跡の一本松で有名になった陸前高田は、山を崩し町全体を嵩上げする大掛りな工事が始まっていた。

仮設住宅が無くなり復興の目処がついた頃、再び同じコースを行ってみたいと思っている。

梅　雨

竹内弘子
埼玉

グッピーの縞けざやかに梅雨兆す
養魚場フィルム曇りに梅雨兆す
釣銭の魚くさくて走り梅雨
犬枇杷を黄金と見つつ梅雨籠る
街路樹の疾風をさまり梅雨に入る
がうがうと廃材を焚く梅雨兆す
石の木に川鵜の群るる梅雨入かな

近代に入って発句が連句から独立し、俳句といえば発句のみを指すようになった時代においても、なお、女性が俳句に近づくことは容易でなかった。（中略）大正期に入っても、その傾向は残っていたが、徐々に女性を俳句の席に誘ったのは高浜虚子であった。虚子のこの時期における先見性は、見事というほかないが、一つに虚子の子に女子が多かったことも与って力があった。

「女子」も本質的には「男子」に劣るものではなく、むしろ男性にはない別のすぐれた詩性をもつことを、父親の眼によって発見し、その可能性を生かそうとしたのである。虚子の偉大さは、それを家族のみでなく、広く一般の女性にまで広げたところにあった。時代の方向を彼は見ていたのだ。

『女性俳句の世界』（上野さち子）より

梅雨の星

田中藤穂
東京

青梅やふと舅姑（ちちはは）を恋ふる日も
柿の花雨の中くる牛乳屋
金魚鉢畳屋さんは根津育ち
旅はじめ水草青き柿田川
江の島へゆく橋長し夏の雲
熟麦の中を下校の子の頭
梅雨の星使途不明なる鍵二つ

皆さんが小学校の校歌をはっきり覚えていらっしゃるのに驚愕している。私は全く小学校の校歌を覚えていない。兄弟五人同じ小学校を出ているのに姉や兄が歌うのをきいた憶えもない。紀元節天長節明治節の歌は憶えているし、東京が大東京になって私の住む日暮里が東京府下北豊島郡から東京市荒川区になった時「紫匂ひし武蔵野の辺に」で始まる歌を歌った。今の天皇陛下が誕生された時は、それまでずっと女のお子様が続いていたので曇り日の夕暮れの町にサイレンが鳴り渡り「サイレン、サイレン、鳴った鳴ったポーポー、皇太子様お生れになった。」という歌を歌った記憶がある。何で校歌は記憶にないのか。因みに私の母校は東京市第一日暮里尋常小学校です。

青時雨

長崎桂子
三重

寄植に押分け覗く葱坊主
朝より影を選びつ草むしり
黒鯛の焼き目気にしつ夕食時
町中の流れ速まる青時雨
洗はれて看板鮮明青時雨
青時雨草木新し美術館
伊勢湾の絵画の展示卯浪かな

四日市市はどんどんと負担額の増える医療費を少なくしたい、と六十五歳以上の人を対象に、今年度から月一回「はつらつ健康塾」に参加しましょう、との呼びかけに第一回に参加しました。まず患者の増えている、骨折と認知症についての予防と対策を詳しくお聞きし、質問をする方も居て四十分間程でした。次は体を動かしましょう。とストレッチをする時は一から十まで声を出し、十種類行いました。心地好い汗をかなり掻きました。

最後はカラフルなメドレーベルを使って唱歌を歌うのとお遊びで「幼稚園児だね」と参加者の一人が言えば係の方は「園児はもっと上手です」の言葉に、大笑いになった。可愛い楽器に触れた楽しい一時でした。

合歓の花

森　理和
東京

あぢさゐや先づはお食事あぢさゐ膳
魚の群る橋の袂に合歓の花
何時の間に葉は閉じてをり合歓の花
床に落つ一片の菓子に蟻の列
青みかん畑は静かに見守らる
梅雨らしき梅雨と四つ組む傘を買ふ
稜線を一筆描に夕焼落つ

「天狼」創刊から一年ほど経ったころだろうか、「暖流」主宰・瀧春一に頼まれて原稿を書いたことがある。その題は、「誓子は神の化身である」などと大それたもので、句集『遠星』『晩刻』を論じた内容であった。ちょうど春一が無季俳句を作っている一時期のことである。その文章を読んだ秋元不死男が一杯やりながら、「木枯君は、やはりカミカタの俳人だなあ……」と呟いたことがが、いまでも耳に残っている。不死男はユーモアたっぷりにそう評しただけだったが、春一やほかの俳人たちには、呆れられ、「八田木枯は神がかりだ」とさんざん叩かれたものであった。

八田木枯

「山口誓子の一〇〇句を読む」より

☆

山荘慶子
埼玉

練習の櫂の揃ひて夕焼雲
凌霄の花咲きのぼる空き家かな
蛇見しと聞きたる後の小径か
先づ犬に声掛く夏の夜明けかな
夏夕幼子の声弾みゐて
障害の子等かがやけり青葡萄
気負ひ無きよはひとなりし柿の花

障害のある少年ばかり働いている小さなパン工場のショップで売り出しがあるというので少しでも励ましになればと数人で出掛けました。

庭の隅には初夏の光を浴びて青葡萄が美しいグリーンの葉かげから沢山ぶら下がり傍にテントも張られ、少年達は明るくのびのびと働いていました。保護者の方達も手伝ったりのんびりコーヒーを召し上がったりで暖かく家庭的な雰囲気に包まれていました。

売り出しは盛況でパンはすでに売り切れなのでクッキー等を買い求めてスタッフの方達のご苦労と少年達の将来に思いを馳せながら帰路につきました。

梅雨晴間

赤座典子
東京

幾重にも山脈あらむ夏霞
高原の桑の葉アイス青臭し
薫風や千曲川源流一跨
介護士の透き通る声朴の花
雨上がりしずく重たげ杜若
梅雨晴間せはしく響く槌の音
梅雨晴間小犬のワルツ聞え来る

四阿山は日本百名山の一つ。信州上田市の真田氏の里で、その中腹にあずまや高原ホテルがある。

広い敷地の花壇には都会には珍しいルピナスが各色盛りであった。花の房はプクプクと弾力がありつまんだ指が跳ね返されるほどで思いがけなかった。

フロントで案内図と熊よけの鈴を借り探索に出発。散策路は整備されておりカラマツ林を抜けると鶯、郭公、松ゼミ等がにぎやかに鳴き続けていた。千曲川源流は、なんと路面に湧き出していた。幸い熊にも会わず、途中白樺の倒木で休むなど一時間強　ゆったりと自然に浸ることが出来た。

梅雨を味はふ

秋川　泉
埼玉

梅雨の月うすずみ色に野も山も
緑鳩の海辺にむれる昼さがり
五月闇木の葉したたる山の道
満々と代田の面に映る空
梅雨寒にマグリットの部屋迷ひ込む
キラキラと柳のわたげ流れゆく
歩み止めフカフカフカの夏落葉

☆

井上石動
山梨

面皰のただぬつとゐる暑さかな
ががんぼの弾かれに来ぬ床灯
赤壁のつづく古町片かげり
炎天をゆく足ばやの黒衣かな
潮騒のかすかに聞こえ蚊火の宿
うらうらとゆらぐ底砂章魚の恋
露草やコンビニの朝始まれる

梅雨空のもと六月末、友人と千葉県鴨川にドライブをした。仁右衛門島。南房総鴨川市太海浜の目前にぽっかり浮かぶ三万平方メートルの島。二丁の櫓の渡し舟で五分程。風光の美しさと源頼朝や日蓮聖人の伝説。昔より所有者平野仁右衛門が一戸だけ住んでいる。芭蕉から秋桜子など句碑多数。私は、現代とは異なる世界を散策した感にみまわれた。ここで『源頼朝かくれあな』という所があった。頼朝上陸地は、定説『竜島』は、一九三五年に県指定史跡となり鋸南町では毎年「頼朝まつり」が行なわれ地域に根付いている。一方、館山市洲崎説も唱えられるようになった。元千葉市立郷土博物館長の丸井啓司氏が二〇一二年に漂流と潮の流れを検証して発表。歴史とロマンの多い旅となった。

オリンピック

昭和39年。時に中学2年生。学校全体で聖火リレー出迎え。日の丸小旗を振り。まさに「三丁目の夕日」の時節。時経て、一つの建物に２５００億を遣って迎えるとかいう五輪。たかが背骨に９００億を遣うとか。こうなるともう、喜劇。まさに「喜劇・駅前五輪」の世界。発想は50年前と何ら変わっていない。これだけの「金」があれば、今の日本の喫緊の処へ充填できる。建物で自慢する国情など、とうに卒業の日本では？「熟した日本」でいいハズ。米・ボストン市は、すっぱり候補を降りたとか。彼我の「民度」の違い。なべてシンプルがベスト！　閉会式は、こつまらぬセレモニーなど一切省略。大輪花火・提灯の波の下、参加者全員へ浴衣を誂えての「盆踊」。いいと思うのだがなあ。ヲドリヲドルナ・ア・ア・ア・ラ　チョトニッポンオンド　ヨイヨイ。

をどれをどれ盆ぞみ魂もそとをどれ　**石動**

☆

王岩　愛知

うら悲し物音もせぬ遠花火
眺めれば漫ろに悲し根無草
異国の甘苦の日々や時計草
昼顔や犬吠えてゐる垣根越し
山梔子の花咲く宿の庭ゆかし
粽解くその手の白さやはらかさ
幸多き富貴の家や牡丹花

先日、友人の撮った花火の写真を見ました。花火は中国語では「煙花」、「焔火」と呼ばれ、祝日や祭日によく打ち上げられます。日本では夏の夜空を彩る風物詩とされ、この時期、いろんな所で花火大会が開かれます。来日後、幼い息子を連れて名古屋港や庄内川公園、そして少し遠出して岡崎の花火大会を見に行ったこともあります。高々と夜空へ打ち上げられて美しく開いた花火を眺めて歓声を上げたその息子はいつの間にか大きくなり、今はお仕事で忙しい毎日です。そのせいもあって、今はもう一緒に花火を見に行くことはないです。花火が鮮やかに夜空を彩った後のような一抹の侘しさを禁じえないです。「うら悲し物音もせぬ遠花火」という句は友人の花火の写真を見て詠み得た句で、「愴恨傷懐此間情、遠空煙花静無声。」と漢訳しました。

サイダー

大日向幸江　埼玉

山百合の風にゆれてる峠道
いつからか坂で一息蝉時雨
お若いね日傘の中に声をかけ
サイダーに喉むせ返るシルバーカード
あご飛んでますます青く海と空
免許返上とぼとぼ歩く夏が来た
六根清浄大山詣夜を徹して
電報のごとく都を雁渡る
春燈ベッドの上のペルシャ猫
子の髪の強く堅しや柳絮とぶ
スイトピー消灯早き子の病棟
コンビニに吸い込まれゐる釣瓶落し
木守柿空ってこんなに広いんだ
生涯を脇役として草紅葉
鮃棲む星の光の届く海
通るたび声懸けてみる寒の鯉
ポリープの話長びき着ぶくれる
フランスの麦秋思ひ麺麭を買ふ
オルガンは風の音せり鯉のぼり
稲の花胡麻粒ほどの虫のをり
立冬のポプラ麒麟の姿せり
遠足の先生小枝のタクトふる
方舟みたい梅雨寒の動物園
夏草に家鴨ぽつかり坐りをり
鶏の声低くして野分待つ
手に魂を渡されました水蜜桃

「獐」より　佐藤喜孝抄

☆

斉藤裕子
東京

お昼寝と猫が決め込む籐の椅子
梔子の皆俯きて匂ひけり
梔子のつぼみ翡翠の縞模様
餅米の硬さを持ちて南天蕾
母卒寿免許返上華日傘
梅雨の日に薬より効く母の葉書
談話室で主治医の書展額の花

☆

佐藤恭子
東京

蓑亀のみじかくもなり長くもなり
枝伐つて梅雨の憂さをばやりすごす
現世はほんに栖みにくかりと蟻
手廂をもれ出であぢさゐ色深む
水羊羹顔映してはわらひこげ
七変化どないすんねんこの憲法
半仙戯妹の口かわゆく見ゆ

「オルゴールをききながら母さんは、裕子お前のことを思っているよ。気をたしかにもって、ようじょうするのですよ。つゆの雨が今も降っているよ。琢磨も元気で多忙な毎日です。私も車にはのらなくなったが足でかせいでおります。」

血栓が見つかり一週間ばかりの緊急入院をし、延期になっていた抗癌剤治療をやっと再開した次の日の朝、母から一枚の葉書が届いていた。拡大鏡を使いながら書いた平仮名いっぱいの葉書だった。しかし、確りと書かれた字に、母の精一杯の気持ちが込められているようで、涙がこみあげ大声で泣いてしまった。有難かった。頑張ろうと思った。目覚めた時一番に目に入る場所に葉書を飾った。

車の免許を返上した母は、また散歩をしたり、絵や習字をやり始めたらしい。弟のマシンで気まぐれに筋トレもやっているという。九十の母はまだまだ私の先を歩いて行く。

テレビの番組はニュース以外は録画をして見ている。何故かこの頃食べることを（料理することもあり）題材にする番組が多くみられる。料理は自分勝手にアレンジ出来るので見ることが好きだ。ところが具材の調達に出かける所まで皆んなに知ってもらおうと映し出される。最近特に神経過敏症になってしまったのか、生き物のところに行って食べる部位の説明などが多くなったように感じている。毎日のように肉・魚・野菜と口にしているのに。豚舎や、牛舎又放し飼いの鶏と……。

自分勝手な想いに悩んでいる。身勝手な自分に呆れている。

☆

篠田純子
東京

金魚を繁殖させて青年恋もせず

東京湾納涼船浴衣ダンサーズの腰つき

はつ夏の汗とボサノバ絡みあふ

よろける雀咥えた青虫暴れをり

窓の外にこちら見てゐる鳩の雛

禅寺の池の金魚の肥えてをり

二言三言交わす付き合ひ半夏生

突然、不忍池に行きたくなる事がある。今日は七月五日、蓮の花を見に出掛けた。午後一時を過ぎていたが梅雨空でさして暑くも無く、蓮は綺麗にさいていた。最近蓮池に張り出した遊歩道が整備され、そこに立つと池の中に浮かんでいるような気分になる。花の散った後は緑色の花托が若々しい。蕾も明日の分、明後日の分と見分けられる。

ここに来ると野良ネコに会える。毎回ではないが、ハモニカのおじさんにも会える。何時ぞやは缶ビールを飲みながら、フランク永井の歌を唄っているおじさんも居た。人同志関わらないようでて、邪魔しない程度の自己主張が面白い。

ケーキと餃子を買い、蝮屋のとぐろと舌の動くのを眺めて満足した。

六月作品より

斉藤裕子・佐藤喜孝

いかれどもわらへどほうほうほおほけきょ　佐藤喜孝

皆平仮名で書かれていて、全部の音が鶯のさえずりのような軽やかな印象を受けました。しかし、読み込むと含蓄のある句だなと思いました。人間には喜怒哀楽があって、いつも軽やかに笑ってばかりはいられません。でも、どんなに怒っていても、あるいは泣いていても、鶯の声を聴くとその声に魅せられて、一瞬怒りや哀しみが遠のく、あるいは薄らぐような気がします。この句は、作者の気持ちを詠っているのでしょうが、何だか鶯が、怒ったり笑ったりしている人間を慰め励ましているようにも思えました。鶯も生き物だから、きっと喜怒哀楽があると思うのですが、あの鳴き声でいつも笑い飛ばしているのでしょう。肖りたいものです。（裕子）

しろたへの蝶なか空をきりきざむ　佐藤喜孝

身をかすめわらひ上戸の紋黄蝶

二句共に蝶の舞い飛ぶ情景を詠っているのですが、それぞれの情景の違いを見事に表現していると思いました。前句は中空を飛ぶ蝶。蝶の薄く美しい羽を見ると、か弱い生き物に思えるのですが、中々力強い一面をみせる時があります。風に流されそうになって飛んでいるかと思えば、高い所へ勢いよく舞い上がり、また方向転換して舞い降りる。自由自在に空中を直線的に飛び回る。あの小さな体のどこにそんな力があるのかと思ってしまいます。「きりきざむ」

ぴったりの表現だと思います。二句目は、人のいる低い所でひらひらと舞っている紋黄蝶。小さな可愛い紋黄蝶が、すぐ近くをまるで作者に戯れるように舞う姿が、「わらひ上戸の」で楽しく表現されていると思いました。（裕子）

ぬめぬめと上下する鵜や迎へ梅雨　篠田純子

「迎へ梅雨」は梅雨を迎える頃、走り梅雨と解釈しました。鵜を近所の橋の上から、街の中を流れる川で見かけることがあります。本格的な梅雨になり川が増水したりすると、餌にもありつけなくなる。そうなる前の腹ごしらえで鵜も忙しいのでしょう。「ぬめぬめと上下する」は、鵜が水の中の餌を求めて何度も潜ったり、頭を出したりする様子をよく表すと同時に、水に濡れた鵜の黒光りした体の触感まで伝わってくる表現だと思います。人間だけでなく、鵜も鴉も鴨も、生き物は生きていくのに皆一生懸命です。（裕子）

この花のこの名をもらひ金鳳華　定梶じょう

力を入れて作られた句は勿論読みごたへがあるが、肩の力を抜いて作られた句は、読手をもゆったりとした心持になる。花を前にした作者はこの花の身に余る厳かな「金鳳花」といふ名にふとほほゑむ。良い名を貰ったねと話しかけてゐるやうである。花への慈しみが伝はる。と読者は勝手に詠者の心を想像してみる。

あさぢふの小野のやまどり立夏かな　々

枕詞を一句の中に使ってみたいとこころみるのだがいまだに果せない。掲句、俳句がこのやうにたっぷりとした時空を内包できることに改めて羨望してゐる。短歌が持つことの難しい広がりをこの俳句は有してゐるとおもふ。

新緑のとりわけ眠く五時限目　々

私のことを詠まれたのかと思った。弁当を食べた後の五時限目は教科書を立てかけその陰で寝てゐた。この癖はいまだに抜けず困ってゐる。ただ事で終りがちなことを「新緑のとりわけ」とさりげなくすべり出す表現は心憎い。

千枚田生れのおたまじゃくしかな　々

この句も含めじょうさんの必要なものしか無い表現はこの句にも引継がれてゐる。「生れ」と詠ふことでおたまじゃくしへの心の触れ方を知ることが出来る。《千枚田朝に蝌蚪の孵りけり》と比べるとそのことがよく分る。高島茂は句を評価する物差として「活字に乗るか乗らぬか」といふことをよく言った。茂の独特な感覚で、句会では目立たぬが、活字にすると句が際立ってくると言ふのである。じょうさんの句は短冊に筆文字で書くとなほ一層余情が溢れるやうな句である。（喜孝）

目高追ふズボン濡らしてあねおとと　須賀敏子

元気に目高を追って遊ぶ仲良しの姉弟。楽しい笑い声が聞こえてきそうな微笑ましい句。「あらあら、ズボンがびっしょりじゃない。」と言いながら見守る作者の笑顔も浮かんできます。（裕子）

夏潮やビュッフェのサインでかでかと　田中藤穂

東洋画では作品の上に文字を書いたり印を押したりしそれを作品の一部として鑑賞する。ビュッフェのサインは確かに大きい。大きいが絵と一体化してをりおもしろい。掲句は海が見えるホテルのロビーででもあらうか。「でかでかと」が諧味のある句にしてゐる。ビュッフェには「海の見えるホテル」と題する作品があるといふ。（喜孝）

三輛の電車走りて夕焼雲　　山荘慶子

のどかな田園風景を想像しました。通勤通学の人や、沿線の住民を乗せて走る三輛の短い電車。大切な電車。作者が見たままを素直に詠んでいる句なのですが、夕焼雲がとても効いていると思います。目に浮かぶ情景をそのまま写真に収めたくなるような句でした。（裕子）

木洩日のなづさふグラス青葉風　　井上石動

若葉も色濃くなり、葉も茂り始める頃、風に揺れる樹々の間から、お日様の光がきらきらと洩れてくる様子はとても美しい。テーブルに置かれた、冷たーい水の入ったグラス。そのグラスに木洩日が当たり水の中でキラキラ揺れて漂っている。「なづさふ」という語が魅力的で日本語の表現の豊かさを実感しました。「木洩日」の動きが生き生きと浮かんできて、「青葉風」の様子もとても心地よく感じられる句でした。グラスの中は、ひょっとするとアルコールだったかもしれませんが、私はこの句には、やはり水の方が相応しいような気がします。（裕子）

雨燕逆巻く浪を掠め飛ぶ　　王岩

調べると、雨燕は日本に夏鳥として渡来し、高山や海岸の断崖の割れ目などに群棲するという。岸壁にしがみついてぶら下がるように留まり、樹枝に留まることはできず、地面に降りると脚で歩いたり羽ばたいて飛び立ったりできないという。しかし、飛行速度は鳥類の中でも最速の部類に入り、時速一六九キロメートルにも達するという。飛んでいる昆虫を目がけて断崖から最速で飛び立つ雨燕。「掠め飛ぶ」が、雨燕の素早い動きを巧く表現していて、逆巻く浪の白い飛沫と雨燕の動きが交叉するような感じがして、夏らしくとても好きな句でした。（裕子）

触れもうて草のいろいろてふてふかな　　佐藤恭子

上五の「もうて」がとてもやわらかい響きで心地よいと思いました。「もうて」は、以て（もって）の訛で、……しながらという意。色んな草花の上をひらひらと舞いながらちょっと触れていく蝶。「草」で始まる中の句、下の句が全部ひらがなで書かれているのも、読んでいて目にも心地よく、蝶の軽やかさ、愛らしさが伝わってくる句だと思いました。（裕子）

悠久のフォロ・ロマーノに鼬草　　赤座典子

今回の旅吟特別作品を詠んで無理をしない作品の作り方に感心した。このことが読む人が自然に句に添うてゐるのである。掲句「悠久の遺跡」で終ってゐればどこかの観光地のキャッチフレーズである。しかし、ここからが長年俳句を作ってこられた典子さんの出番である。鼬草は連翹の古名とある。下五「連翹黄」では台無しである。典子さんも先刻承知。連翹を鼬草にした感覚は長い間俳句に携ってきた贈物である。（喜孝）

素っぴんをお見せしますわ額の花　　斉藤裕子

病院の一室は人生の濃く詰った空間である。そこでの喜怒哀楽は深い起伏があるであらう。といふことが「緊急入院」の端々から読める。しかし、どの句にも陰を見せない心がけは範としなければならない。そして掲句のやうに戯けて開き直ってみせてもふと「目覚むれば癌てふ思ひ夏の蝶」といふ雲が湧いてくる。人間の心は時々刻々動く。時々刻々うつろひやすい捉へ所のない自己を見つめてゐる作者がゐる。

前月抄

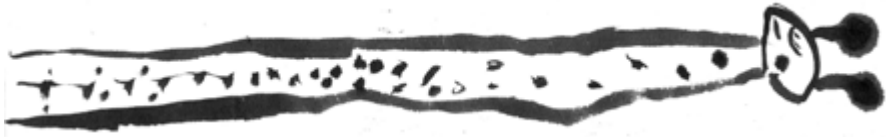
山を出て海にうかみし白端書　佐藤喜孝
岩煙草やぐらの闇へ目を凝らす　篠田純子
あさぢふの小野のやまどり立夏かな　定梶じょう
降り立ちし島の空港風青し　須賀敏子
三度笠なんども翳す村芝居　竹内弘子
梨咲いて人みな遠し相模の野　田中藤穂
五月晴何に出会ふか靴磨く　長崎桂子
五つ六つホームの廂雀の巣　森　理和
子雀の滑り落ちしが飛びたてり　山荘慶子
だからといふ諍ひ聞ゆ夏柳　赤座典子
六義園群青色の木下闇　秋川　泉
妹背鳥近くある夜や茶漬飯　井上石動
恋人を目で追ふ子ある宵宮かな　王　岩

端居して猫ニンマリと笑んでをり　大日向幸江
不機嫌の訳二つあり葱坊主　斉藤裕子
五月三日澄みし天空九条晴　佐藤恭子
鴎過ぐホテルの朝餉のどけしや　赤座典子
教会は坂の上なり春夕焼　〃
春の雲横目の鴎船に沿ふ　〃
悠久のフォロ・ロマーノに鼬草　〃
お見舞に俳句が届く虹の朝　斉藤裕子
素っぴんをお見せしますわ額の花　〃
入院は俳句三昧額の花　〃
うつちゃりといふ手もあるさ鳳仙花　〃

前号正誤

子育に疲れた燕電線に　大日向幸江

喜孝　抄



こだま　六月号

福島や心平の蛙なにつぶやく　松林　尚志

雲の峰　七月号

永井隆記念館
気高くも畳二枚の夏館　朝妻　力

鴫　七月号

夢抜けて夢のごとしや山法師　伊藤　白潮
空腹と言へば空腹青葉寒　井上　信子
春の川海へほぐれてゆくところ　高橋　道子

風土　七月号

激痛の胸初蝶の飛びたてり　神蔵　器

朝　七月号

緑濃し大切さうに門灯り　岡本　眸

峰　七月号

くたびれし浴衣をはだけ平和論　布川　直幸

末黒野　七月号

てふてふの垣の高さを測りをり　松本三千夫

京鹿子　七月号

山ひとついのりの数の春の燭　豊田　都峰

沖　七月号

春光や玻璃八枠に子規宇宙　能村　研三

雨月　七月号

中之島そよ風にさへ柳絮飛び　大橋　晄

万象　七月号

大いなる円を芝生に遅桜　大坪　景章

六花　七月号

歩みつつ日傘をたたむ女かな　山田　六甲

ホトトギス　七月号

結局は挿さずに一日持つ日傘　稲畑　汀子
万緑の島に刺さりし橋の黙　稲畑廣太郎

馬酔木　七月号

湧水に日の斑散らして麦の風　徳田千鶴子

春燈　七月号

傘雨忌や顧みず来し道ひと筋　安立　公彦

雲の峰　八月号

島影を重ねて播磨梅雨深し　朝妻　力

現代俳句　十月号（平成二六年）

鳥籠の中の木の影十二月　浦川　聡子
冬ざくら日にいくたびも湯が沸いて　々

高橋鷹史全句集

寄す波に高さありけり実朝忌　高橋　鷹史
亡き人の付けし鈴振り春の猫　々

鎌倉の春は空より鳶の笛　々
葭切や日の出てをりぬ靄の中　々
海軍の兄の忌たたみ鰯もあり　々
手つかずに冷し瓜あり形見分け　々
大富士や然れどひよどりじやうごの実　々
菊を焚く煙や古書の匂ひして　々
煤逃げのゐる一政の薔薇の前　々
幹はいま清流なせり青芭蕉　々
茄子の馬胡瓜の馬や兵の墓　々

ホトトギス　八月号

ともかくも西瓜を食べてからのこと　稲畑　汀子
生活の灯遠蜩に点りゆく　稲畑廣太郎

馬酔木　八月号

相性はぴつたりのはず心太　徳田千鶴子

萱　八月号

沙羅咲くをあてにし来しが風ばかり　木村　嘉男
青春や銀座に夜店ありし頃　亀田虎童子
夕方のかたちとなりぬ蓴池　小島　良子
琉金の向きをかへるに手間取りぬ　松下　道臣

毎月25日発売
定価1200円(税込)
月刊 俳句界 2015年9月号
90代俳人特集
私の俳句人生
～激動の時代を生きた俳壇の重鎮たちが振り返る俳句人生、次世代俳人へのメッセージ
後藤比奈夫　深見けん二
伊丹三樹彦　有山八洲彦
狭川宗玄　小原啄葉　下鉢清子
〈グラビア〉俳句界NOW　大高霧海
※セレクション結社「橘」佐怒賀直美
私の一冊　辻村麻乃「篠」
推敲の奥の手教えます！
～実力俳人が自作の推敲課程を公開。推敲の際のポイント、注意点がわかる！
○私の推敲方法　山尾玉藻　津川絵理子
守屋明俊　望月周　ほか
○松尾芭蕉の推敲方法
魅惑の俳人　本宮哲郎
●お邪魔します　書斎訪問　佐藤麻績「人」
対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
鈴木宗男（政治家）
別冊　投稿俳句界　一流選者29名！日本一充実の投句欄
※一部変更の可能性があります。
株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳境流連

打水のバケツに浮かぶ葉くづかな　裕　子

（二〇〇七年十月）

主人の父は明治43年、母は大正3年生まれだった。父と20年母とは30年一緒に暮らした。25才で結婚した当初から同居して、食事から全部一緒の生活だった。父も母も物を大切にする人だった。私の母親と10才以上違う舅と姑の暮らしぶりは、私には戸惑う事が多かった。勿論教えられた事も沢山あった。

父（舅）は、母と私の台所仕事の、お米のとぎ汁や野菜を洗った水をバケツに採り、打水や、庭木や、花の鉢に撒くのに使った。父は庭木や花を育てるのが好きだった。家の脇の狭い通路にも鉢がいっぱい置いてあった。父が汗を掻き掻き、バケツから如雨露に移して水を撒くのを見ながら、ホースで一気に撒けばもっと楽になるのにといつも思っていた。

父と母が旅行に出掛けると、この水撒きは私の仕事になった。父は、「裕子が来てくれたから、安心して旅行に行ける。」と言って嬉しそうに出掛けて行った。台湾に2回、タイに1回出掛けた事もあった。国内旅行は2、3泊ですむのだが、海外旅行となるとそう言う訳にはいかない。赤ん坊と幼い子供の世話をしながら、一人で水撒きするのは一苦労だった。父が大事にしている植木や花を、私が枯らしてはなるまいと一生懸命頑張った。

父が年老い、庭の手入れはだんだん私の仕事になった。それまで、正直に言って、父に頼まれてやる水撒きも花の手入れも、私は好きではなかった。しかし、自分の裁量でやれるようになると、どんどん庭仕事が好きになっていった。父亡き後、庭木の剪定や、躑躅の花殻摘みをしたり、梅雨の時期山梔子をきって飾る時いつも、汗を掻きながら一生懸命水撒きしていた父を思い出す。父の生きている時は、台所の水を撒いたりした事もあったが、今では水道からホースで水撒きしている。今でも、父の水撒きは尊敬に値すると思う。

父の水撒きを思い出しながら作った一句でした。

七変化どないすんねんこの憲法　恭　子

第二次大戦の敗戦後、大日本帝国憲法を全面的に改正した憲法。1946年11月3日公布、よく47年5月3日から実施。国民主権、徹底した平和主義、基本的人権の尊重を基調とし……戦争の放棄、基本的人権の確率強化を目的とした国民の権利義務に関する詳細な規定。等々

選挙権を得て、さあ私の思いも選挙に生かされるようになるんだ、と胸踊らせて選挙に出かけた。二十歳の春のあの清々しい想い。五十五年経った今も父ちゃんの耳の下を掠めた弾の跡が鮮明に浮かんでくる。駄目だぞ！他国との戦争は。

原発の渚に遊ぶ夏鴎　幸　江

三十世紀のある渚。

北半球、南半球そんな区別もいらなくなった地球、思えば二十七世紀の人類は核戦争に酔いしれていた。仕掛けた国も、受けた国も、そして巻き込まれた国も今は解らない。人間は抹消された。山は崩れ荒野になった。海の生き物は生き残る事が出来なかった。三世紀を隔てた南半球オーストラリアの渚に一羽の鴎が降り立った。鴎はゆっくりと砂浜を見回す。

海は美しすぎる夕陽を鴎に見せていた。

遠泳や陸路を霊柩車がすすむ　じょう

沖へ向かって三〇〇米も泳ぎ出ると、陸地のもの音は殆んど聞こえなくなる。風向きにもよりますけど、消防車救急車のサイレンも大概そうです。ところが不思議なことに、霊柩車には沖にいてもよく気づくのでした。理由はわかりません。学校の遠泳大会のように大勢が列なして海上にあるわけではありませんので、浮き身でうつらうつらする以外は、立ち泳ぎで陸地を眺めることしかない。霊柩車に気づく理由はそんな処にあるのかもしれません。但し、です。青壮年の頃は、「あ、霊柩車がゆくな」ほどにしか感じなかったものが、随分身につまされる。老いると感受するこころが衰える、というのは嘘です。

銭湯の開くを待つ人白木槿　藤　穂

私との家の近くに銭湯がある。宗湯という名だが以前は太郎湯といって、入口の暖簾にも煙突にも太郎湯と大きく書いてあった。

姑の話では、太郎湯には、太郎という息子さんがいて慶応大学へ行っていたそうだ。

召集令状が来て出征する時に、博多まで行く汽車の半分は兵隊、半分は一般の人が乗れて、太郎さんのお母さんは息子と同じ汽車に乗って、駅に汽車が止まるごとに息子のいる窓へ走り寄って別れを惜しんだのだそうだ。

その太郎さんは戦場から遂に帰ってこなかった。そして銭湯の名に太郎さんの名を残したのだそうな。

次の話はずっとあとのことだけれど、ある日私がお使いにゆこうとその太郎湯の前を通りかかった時、もとは隣組の息子さんで今は都外にお住いの方が太郎湯から出てきた。手にはお湯屋へゆく道具をかかえていた。その方が私に近寄ってきて話しはじめたのだ。「今日は姉の見舞いに来て、時間が余ったのでここのお風呂に入ってきたのですが、お風呂の中で太郎君のことを思い出してしまって……大学が一緒でよく遊んだりしたんですよ。私も戦争に行ったのですが、私は帰還してきましてね。太郎君の家へお悔みに行ったら、お母さんに『太郎は帰ってこなかった、あなたは帰ってきたのに。太郎は戦死してしまいました。』と取り縋って泣かれましてね。辛かったことなど思い出しましてね。」という。私は何と答えたらよいか困って、「そうですか……でも貴方様が悪いわけでも、貴方様のせいでもないんです……」「……」

太郎さんのお母さんも今はもういない。その話をしてくれた姑も、その男の方のご両親ももう居ない。その辛い記憶の日から六十年もたっているだろう。「いやアこんなところですみません。誰かに話したくなってしまって、あなたをつかまえて、つい……」

みんな誰も誰も、心の中にいろいろなつらい記憶をかかえこんでいるのだ。それはあの戦争を通過した世界中の人が、みな持っているものではないだろうか。いや、今も、世界は絶えることなく戦争を続けている。日々また新な哀しみが生み出されている。

太郎湯は今は宗湯と名が変わっている。午過ぎの銭湯の開く時間にはいつも四・五人の人が前に立って開くのを待っている。

だんだんと、戦争を知らない人が日本の人口の多くを占めるようになった。

若き実も抓まんでみたし鳳仙花　裕　子

鳳仙花は華やかではないが、花びらが金魚の鰭の

ようで可愛い花です。しかし何と言っても楽しいのは、熟れた実がちょっと触っただけで弾けて飛び散る様だと思います。完全に熟れていない実も、触れた途端にくるっと反っくり返る。そうなると、これはどうか、これはどうかと若い実をも、次々に抓んで試してみたくなります。これは子供の頃から大人になるまで続いている私の衝動のようです。種子に成り損なった鳳仙花さん、許し給え。

揺する風撫でてゆく風桐の花　　桂　子
目を瞑り黙してゐる男桐の花

自宅の近くの空地に一本の桐の木があって、五月に入ると紫の綺麗な花がさきます。その頃の新聞に、津の観音寺の桐の花は今から一週間ほどが見頃です。との記事があり出掛けて行きました。

観音寺は美しい朱塗りの建造物で山門をくぐり境内の半分弱の敷地に、十五六本の大小の桐の木がどの木も見事に花を付けて居ります。此のうす紫の空間に時時は強い風が来る事があり、枝振りの大きいのは、のた打つような動きで生き物が苦しんでいる様に見えました。

お参りの人も居らっしゃるでしょうが、見物をしている人は二十人ほどいて、男性の方が多く大部分の方はカメラを覗きシャッターの音が引っ切り無しに聞こえてきます。

そんな光景の中で、座って時時花と空を仰ぎ見たり、よちよち歩いている鳩に目を落としていらっしゃる方も居たり、それぞれの何方もすっかりほぐれた表情で桐の花の下の雰囲気を満喫し愛でていらっしゃいます。私もその中の一人で一時を十分に楽しませていただきました。

あをキーワード俳句辞典（こいーこう）

公園
公園の灯を照らすよに花辛夷　斉藤　裕子
賑賑し公園の隅灸花　芝宮須磨子
外国語飛び交ふ公園春の風　東　亜　未
公園に高齢者席松落葉　鈴木多枝子
出初式航空公園梯子立つ　須賀　敏子
料峭の日比谷公園人疎ら　赤座　典子
公園の出口を探す落葉径　吉弘　恭子
公園を囲む鉄棒静電気　大日向幸江
公園孤島驟雨愉しき杉楓　堀内　一郎
かはほり飛ぶ日比谷公園盆踊　篠田　純子
公園の野茨の芽にべそかく児　長崎　桂子

高音
だしぬけに高音発す木の葉笛　竹内　弘子
合唱の高音低音冬の星　長崎　桂子

校歌
身贔屓の校歌流れる夏の空　森山のりこ

効果
読始め辞典光電効果の項　定梶じょう

高架
高架ホーム少女の声の冴えざえと　山荘　慶子
高架より町を見下す枯木立　芝宮須磨子
冴返る高架の下の日本橋　木村茂登子
往きかへる高架下けふすがれ虫　篠田　純子

硬貨
てのひらの硬貨のにほひ氷菓子　後藤　志づ
梅雨じめり窟に硬貨ちらばれる　竹内　弘子

後悔
云ひ過ぎて後悔少し鰯雲　芝　尚子

高級
初時雨高級官舎の窓灯り　芝宮須磨子

皇居
にほどりや皇居の警士歩を返す　後藤　志づ
皇居秋晴れ目がかすむから身を反す　堀内　一郎

航空
杉の穂のさみどり航空路に尖る　定梶じょう

嚴島

長崎桂子

青葉光嚴島神社鹿悠々

青葉風安芸の宮島大杓子

青山河雅な社殿朱の鳥居

夏の湾美し平ら大鳥居

夕南風波白くして社殿打つ

潮引くや鳥居全容夏の月

干潟出でライトアップの夏はしゃぐ

明易し史跡かずかず原始林

夏潮の透き通る朝嚴島

慶良間
八重山

須賀敏子

激戦の慶良間諸島に薄暑光
何処までもケラマブルーの夏岬
夏畑柵の向かうに慶良間鹿

亀の子の十五分ごと浮上せる
橋に寝て星座あれこれ薄暑かな
ギリギリと搾り立飲む砂糖黍
八重山のおまんがときの蛍かな
囀はマングローブで赤翡翠（あかしょうびん）
三線の音ゆるやかに夏夕べ
よくあるさー台風一過道を掃く

お知らせ

以前、竹内弘子・堀内一郎両氏にお願ひして選句欄を設けてゐました。しばらくお休みをしてゐましたが、再開することに致します。選者は定梶じょう氏にお願いしました。選句欄を「はしたて集」（仮名）とします。

出句　五句。

「作品集」は七句出句でしたが五句に変更します。計十句となります。また、自作品の下段の随筆はしばらくお休みさせていただきます。

投句用紙は「はしたて集」「作品集」で一枚になってゐます。十句全てお書き下さい。

送付先は「あを」編集部。

締切は月末。

「はしたて集」「作品集」は郵送又はファックス。

注意＝原稿は編集部が一括して選者に郵送しますので期日厳守でお願ひします。また、随筆・特別作品は従前どおりメール・ファックス可。

右ご協力お願ひします。

あを編集部

あとがき

定梶じょうさんに選者をお願ひするのに失礼にも電話で済ませてしまった。それも掛けやうか迷って止めた電話がじょうさんの着歴に残った。翌朝なんですかと電話を下さった。その電話でお願ひしてしまった。失礼を重ねてしまった。選者に立ち向ふのも、甘えるのも楽しいことである。

（喜孝）

御厚志多謝

斧田綾子　様　　田中藤穂　様

二〇一五年八月号

発行日　七月八日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・松村美智子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。